



〈歌・小説・日本語〉⑤
「十七条憲法」以前と以後
勝又浩

もう昔話になるが、『池亭記』の著者で、前回の賀茂保憲女の叔父にあたる慶滋保胤について調べたことがあった。そのなかに、彼の数ある奇行エピソードの一つにこんな話があった。ある日、朝廷に出勤すると門の前で女が泣いている。事情を聴いてみると、夫が「石帯」を失くして門に入れず困っていると言う。下級の役人だったのだろう。同情した保胤は自分の帯を取って与えてしまった、というのである。この「石帯」とは牛皮でできた幅広のベルトで、背にあたる部分に玉や石が嵌めこんであり、それによって官位を表わし、また朝服の一部であるから、身分証明ともなったものだという。保胤は、一面は熱血漢だが、同時にとっても人情家、心優しい人物で、所用で馬

に乗れば、馬が道草を食うに任せて止めなかったために遅刻ばかりしていたなどという話も残っている。こんな話を今思い出したのは、最近『古代日本の官僚』（虎尾達哉、中公新書）を読んで面白く、またいろいろと刺激を受けたからだ。本のサブタイトルを「天皇に仕えた怠惰な面々」としているが、まことに宮廷人たちのペラポーな怠勤ぶりがこれでもかと言うように列記されている。役人たちの遅刻や無断欠勤などは日常茶飯事であったらしい。時代は少し下るが、それから見れば保胤の遅刻遅参癖などはまだ罪のない方であったかもしれない。あるいは、そんな役人勤務だから彼も許されていた、ということなのだろう。遅刻どころか、宮廷では最も大事な儀式

である正月元旦の「朝賀の儀」さえ無断欠席多数、ためになかなか始められなかったり、仕方なく急遽乗り出された下級官員たちをサクラのように列席させて形だけは整えたと、そんな例が『日本書紀』にも記されているのだというから驚く。

いつの時代であったのか、朝廷の權威もそこまで落ちたかと思いたいが、著者に言わせれば、それは歴史を見る眼の惰性的な「思考停止」であって、落ちたのではなく、それが「常態」であった事実をもっと知っておくべきだ、ということになる。辞令伝達式にさえ出頭しないばかりか、任官の命が下っても赴任しない、つまり事実上の任官拒否すらまかり通ったのだという。それでいて、儀式の終了後には付きものであった宴会には怠りなく出席して大活躍などというモサモサもいと紹介されている。

むろんそうした状態を改めるべく、制裁を伴った新たな政令がたびたび下されたが、それも無視されることが多を取り入れるまで、人の行為の善悪を裁く基準はなかった……とは、やっぱり極論、暴論に過ぎるだろう。著者は何故か引用してないが、「十七条憲法」「和を以つて貴しと為す」の次には、「篤く三宝を敬へ」と定めている。「三宝」とは仏法僧のことだ。これも「官僚の心構え」の内であったし、事実、聖徳太子以後、日本は仏寺をたくさん創建してきた。言い換えると、儒教以前にも仏教という国家レベルの、生きる規範が間違いなく存在したと言

うべきであろう。そんな次第で、著者の言う「十七条憲法」は官僚の勤務心得、儒教以前の日本には道德規範が無かったという説には賛同しかねたが、ただ逆に、聖徳太子以前には、日本全体をカバーするような道德律が無かったのだという事実は、改めて気付かされた。そしてそこから、たとえば『万葉集』などは、その道德規範成立以前の文学作品集なのだという事実も改めて考えてみる必要があるな、と思ったのである。

かった。会場で出欠を取る制度を設けるが、それでも現れない。仕方なく影から代返させて体裁だけは守るが、結局その代返が新しい慣例になってしま

うのだから笑うに笑えない。ちなみに紹介しておく、律令制時代の役人の登庁は朝の六時半だったそう、その刻限までに通用の門前に集合、そこで官服に着替えて、門は「匍匐の礼」、つまり四つん這いになって通過しなければならなかったのだという。六時半とは、夏はともかく冬は厳しかつたらう。遅刻も欠席もそれゆえかもしれないが、先の石帯を失ったか忘れたかした官員なども、この着替え通門の儀礼のところで引つ掛かっていたのであつたらう。

面白い話を拾っているときりがないが、こうした律令社会官僚たちの怠惰な勤務実態から日本の歴史を見る著者は、それゆえ、かの、聖徳太子「十七条の憲法」も、それは国家の思想理念などという上等なものではない、元来は官僚たちへの戒めとして作られた、

官僚勤務心得として書かれたものには過ぎない、と言っている。「和を以つて貴しと為す」から始まる「十七条の憲法」、私などはずっと日本人、日本文化の根幹をつくった思想だと信じてきたが、言われてみれば確かに、「群卿百僚、早く朝りて晏く退れ」（第八条）というようないく条もある。これはまさに勝手な遅刻早退は許さないということだろう。宮仕えなどに縁のない庶民にはたしかに意味のない「憲法」だ。著者によれば、官僚に限らず、日本人が現今のように規律正しく働くようになったのは江戸時代以後、幕府による儒教思想が行き渡るようになってからのことだ、ということになる。「十七条憲法」が単なる「官僚群創出のための施策」に過ぎなかったのだとすれば、たしかに日本には庶民も含む国家レベルでの道德規範が無かったことになる。天照大神を初め日本の国土と人間を造った神々は、天地自然は采配したが、人間たちの生き方、道德までは規制しなかったからだ。それゆえ儒教



〈歌・小説・日本語〉60

ある一首の生い立ち

勝又浩

今ぞしる。みもすそ川の流れには。

波の底にも都有りとは

これは安徳天皇が二位の尼に抱かれていよいよ壇ノ浦の海に飛び込もうというときに詠んだ一首。

と言つても実は今月、歌舞伎座で片岡仁左衛門の「二世一代」、演じ納めたと謳われた『義経千本桜』、その「渡海屋」「大物浦」の段を観て、そこで聞いた台詞の一つ。子役が例の一本調子の高い声で唱えるように言うのだが、この場合はそれが見事に効果を發揮、劇場は拍手で湧いて、私もグツと来てしまった一人。「大物浦」は仁左衛門以外でも何度か観ているが、幼帝がこんな歌を詠うのは記憶になくて、今度初めて知ったような感じであった。それで、帰宅してから改めて調べてみて右の字

句を確かめた。

「みもすそ川」は御裳濯川で、伊勢神宮の結界のように流れる五十鈴川だ。名の謂れは神宮、天照大神の御衣の裾を濯うということだが、ここでは天皇自身が言うのだから皇統皇孫という意味になって、その在ます所は即ち都だから、波の底にも都があるというわけだ。安徳帝は二歳で帝位について、壇ノ浦のこのときは八歳だとされている。今でいえば六、七歳である。舞台ではほとんど動かず、移動するときは必ず誰かに抱えられて、まるで生きたお雛様である。そういう子供が、まだ意味もよくは分からないであろう自分の死を前にして詠う、一種の辞世歌というわけだ。

ところで、これはむろん芝居のなか

歌舞伎台本との異同があるだろうが、この歌に関しては変わりはないようだ。ただ、幼帝に海の底にも都があると教える役割の女性がそれぞれ違っていて、そこが面白い。『平家物語』では二位の局、つまり清盛の妻時子で、安徳帝には祖母になる人の役割であったが、歌舞伎では女官「典侍の局」である。これは直前まで渡海屋銀平（実は知盛）の妻お柳であった人物が知盛とともに本来の姿、身分に直って幼帝に仕えているわけだ。

一方、文楽ではこの役割りが乳母になつていて、幼帝がまずこんなふうに問うている。「コレのみ乳母。覚悟〜といふていづくへ連れて行くのじやや」と。ここでは二位の尼は既に入水してないのだ。そこで乳母が、「此の波の下にこそ。極楽浄土といふて結構な都がござります」と教えずことになる。それを聞いた幼帝が「ア、恐ろしい波の下へ。只一人行くのかや」と嘆くと、乳母が自分がお供すると答えて幼帝は納得。そこで件の歌が詠まれるが、今

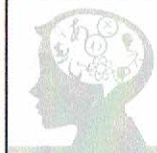
度は乳母が感激している。「ヲ、お出かしなされた。よふお詠み遊ばした」と誉め、これをあなたの両親、祖父母、つまり高倉天皇・建礼門院、清盛・二位の尼ということになるが、に聞かせたら「何ぼう悦び給わん」かと思ふが、しかし「今はの際に是がママ」と云ふにかひなき御製や」と嘆く。
長々と辿つたが、要するに文楽では安徳帝に乳母を絡ませることによつて、幼帝の幼帝たるところをいっそう際立たせたと言つてよいであろう。大阪庶民の芸能たる文楽のパワーなのだ。
しかし、「今ぞしる」の歌物語はまだ続く。ここに引用した人形浄瑠璃の『義経千本桜』(岩波版『日本古典文学大系』)の語注はこの歌の初出が『源平盛衰記』だと記している。しかも安徳帝の詠ではなく、二位の尼がまさに飛び込まんとするとき、幼帝に言つて聞かせた歌だと。なるほど、「みもすそ川の流れには」などの語意からすれば、帝自身の詠だとするより、二位の尼のことばだとする方が確かに自然なのだ。

でのこと。実際の、かどうかは分からないが、『平家物語』では、安徳天皇は歌など詠んでいない。これから海に飛び込むのだと聞かされて、「尼せ、われをいづくへ具してゆかむとするぞ」と訊ねている。やっぱり不審不安ではあつたのだ。それに対して二位の局は、「この国は粟散辺地とて心憂きさかひにてさぶらへば、極楽浄土とてめでたき処へ具し参らせさぶらふぞ」と言い聞かせている。「粟散辺地」は辺鄙な地のちっぽけな国の意だという。そして自らも東に伊勢大神宮を拜み、西に念仏を称えてのち、幼帝を抱いて入水するのだが、そのとき最後に言い聞かせたことばが、「浪の下にも都のさぶらふぞ」であった。波の下の都のイメージは共通するが、歌ではないし、安徳帝が言つたでもない。

では誰が歌につくり、幼帝に言わせるようにしたのか。実は私の手元には歌舞伎の台本がなく、冒頭に引いたのは、歌舞伎がそれによつて文楽浄瑠璃から採つた。全体としては当然

『源平盛衰記』は残念ながら読んだことがないし、テキストも家がない。ただ私の知るのは、『平家物語』の別バージョンとして、大勢の人たちによつて書き継がれてきた歴史物語だから、こうした。創作もかなり多いという事実である。そして、その分だけ面白いから、後のさまざま文芸作品に活用されているが、この「今ぞしる」もそうした応用の一つなのだろう。

思うに、『平家物語』にあつた「浪の下にも都のさぶらふぞ」の一言、この意表を突いた鮮やかな一句が全ての始まりなのだ。『源平盛衰記』の作者はこれを惜しんで一首の歌にまで成長させた。それを讀んだ次の浄瑠璃作者は、歌の主を二位の尼から安徳帝自身に移すという、創作を加えた、というわけである。詠者を変えることで、歌はまた別の命を吹き込まれて生き続ける。こういうあり方が、日本の民族文学たる短歌俳句の大きな力、性格だ。歌も俳句も、それはいつでも詠む人・読む人の共同制作なのだ。



〈歌・小説・日本語〉⑥1

万葉集雑感、雑談

勝又浩

度々の仕官の要請を断り続けたような人だから、大政奉還にあって大喜びはしたが、新政府の誕生までは見ることもなく亡くなっている。いつの時代も「たのしみ」は決して長くは続かない、ということなのだろう。

*

新しい年の始に思ふどちい群れて居れば嬉しくもあるかな(道祖王)
長引くコロナ非常時のためにいろいろな行事が中止になったり廃止になったり、私などは人と会う機会がめっきり減った。なかでも、差し迫った要件や目的のない、従って気の置けない仲間たちと遠慮のない無駄話のできる集まりがすっかりなくなってしまったが、なくなってみると、そうした不要不急の集まりこそが、社会のためにはともかく、命のためには大いに必要なのだと気が付いた。

そんな鬱屈を日常としているせいだろうか、「万葉集」に関する本を読みながら右の一首に目が留まった次第。作者「道祖王」とは、新田部皇子の子で天武天皇の孫にあたる人だという。つ

まり八世紀半ばの人だが、人の、「思ふどちい群れて居れば嬉し」という気持には今も昔も変わりはないわけだ。ついでにもう一首引けば、次は江戸時代末期である。

たのしみは 心をおかぬ 友どち
と 笑ひかたりて 腹をよるとき
(橘曙覧)

もつとも、今はコロナ禍に続いて戦争まで起きてしまったから、「友どち」が集まっても「鼓腹撃壤」などというわけにはいかない。昭和二〇年五月の横浜大空襲の体験者としては、この二一世紀になって、全く何たることだと思えばかりだが、実は、先の道祖王も後には藤原仲磨の乱に巻き込まれてその後の消息は分からないままなのだという。また橘曙覧も、福井藩主からの

本誌三月号、内藤明の巻頭歌に共感するところが多かった。現代の歌人についてはほとんど知らない私は、内藤明についても失礼ながら初めて読んだ。そして同世代の人かとも思ったが、調べてみれば私より一回り以上若い、まだ現役の先生だと分かって意外だった。生活観(感?)というようなところで共鳴するところがあるのだろうか。それで勢いがついて、手に入った第四歌集だという『夾竹桃と葱坊主』(平成二〇年、六花書林)を覗いてみたが、だいたい期待した通りということだった。

朝顔の枯れたる花を摘みゆくに記憶はとほき庭の黒土

こんな一首に私は、大空襲の後の焼け野原に焼けたトタン板の下から蔓を

出していた一本の朝顔があった、そんな光景を突然思い出したが、むろん作者の見ている景色とは関係がない。

型通りの人間嫌ひを信条に生きし
一世か恙なかりき

「型通り」の一語が効いている。直球でなく、この一語が付いてくるような「人間嫌い」であることによって、後の「恙なかりき」も許容され、かえって話ができる人、してみたい人だと思わせるのだろうか。しかし、考えてみれば「人間嫌い」の歌人というのは、そもそも何なのか、という疑問もないことではない。要するに近代の短歌はこうした自意識にも耐えなければならぬということだろう。そして、それ故に自意識を棄てるということも生まれてくるが、そんなところからこそ次のような景色が見えてくるのではないだろうか。

萌す葦、そよげる葦にたぐへられ
地に満ちてあしカミ、ヒト、命

「古事記」に描かれた天地創生の光景を詠っているが、ここでは「命」と

いうことばが、まさにこの一首の命になっている。

金子兜太なども言っているように、短歌俳句に代表される日本の伝統文学にはアニメズムが流れているが、それは見方を変えれば、日本文化の根底にアニメズムがあるということでもあって、そうした性格が「古事記」の創世神話の性格をも決定づけているわけだ。そう考えれば、この一首には歌のアニメズムが「古事記」のアニメズムをびたつと捉えた、そうした幸運な合体があるように見える。

この内藤明には『万葉集の古代と近代』(令和三年、現代短歌社)なる近著もあって、これは著者の万葉学者としての仕事をまとめている。実は、冒頭に示した道祖王の歌もこの書に引用されているのを見て初めて知ったのだが、こんな取り上げ方はこの本の趣旨からは外れていることを断っておかなくてはならないだろう。

令和の年号に絡めて太宰府での大伴旅人の梅花の宴ばかりが有名になった

が、梅花を中心にした宴は貴族たちの定番の遊びでもあったよう、この道祖王の一首も正確には「治部少輔石上朝臣家嗣の家の宴」で詠われた三首のなかの一つであった。この本では、こうしたたくさん例のなかに、よく知られた大伴家持の「春愁三首」もあったのだとして、その性格を論じている。

本書全体は万葉学者らしい細密な実証を積み重ねた研究で、正当な勉強なぞしたことのない私には教わることばかりだった。そうしたなかに短歌の性格についての分析分類があって面白かった。それを今、私のことばを交えて要約してしまえば、発生としての呪的短歌・その進化展開としてのみやび短歌、以下、述志短歌と写生短歌、生活短歌と自我・自意識短歌、というような分類である。短歌は、歴史的に見ればこれらの性格が展開し、繰り返されてきたのである。今一つ一つ解説する余裕がないが、これらの用語だけを見ても思い当たるフシありという人も多いのではないだろうか。



〈歌・小説・日本語〉62
現代短歌、雑報雑感

勝又浩

文芸誌「文學界」(五月号)が「特集幻想短歌」を組んでいる。思いがけないことで、ついつい読んでしまい、驚いたり唖ったりだった。思いがけない、というのは、「幻想短歌」の方ではなく、「文學界」がそれをやっているという事実の方である。これが本誌など短歌雑誌のことなら私は気にもとめなかつただろう。「文學界」が、というところがオヤと思わせたのだ。

大勢の歌人、批評家が動員されているが、なかでは瀬戸夏子「人がたくさる」ということ」が、私には一番刺激的だった。現代の通信手段、通信網の激変に伴う、大きくは文学環境の変化という問題を扱って、考えさせられることが多かったのだ。以下、そこから幾つかの話題を紹介してみよう。

短歌」等々と瀬戸夏子は言っている。パソコンのお蔭で若者の中で旧漢字が復活普及しているが、同じように、短歌の定型詩である短歌はSNSなどに馴染み、若者ウケするのだろうか。アイドルへの応援短歌や、アニメキャラクターを擬した歌は、その競技の場まであるという。これには千二百年余生生きてきた短歌の方が驚いているかもしれない。私などは、短歌といえばやはり万葉や古今を原点として考えがちだが、そんなのは、日本を考えるのに奈良や京都しか見ないのに等しいだろう。東京も沖縄も日本であるように、今や短歌にも新宿や渋谷がある事実をしかと認識すべきかもしれない。

もう一つ、瀬戸夏子情報にはこんな例もある。すでに三冊の歌集もある木下龍也は、一方で「あなたのための短歌1首」なる「営業」もしている。「購入者」は自身の悩みや希望を手紙で訴えると、それに応えた励ましや感謝になるような短歌をつくって郵送してくるという仕組みである。歌は作者の

戦争を始めた人が飼っているおれ
の故郷のうつくしい犬(神丘風)

この二月二十四日に「Witter」に発表された一首だという。大きな反響があつて、ここには引かないが、翌日には同調者による英訳まで載つたのだと。お分かりのように二月二十四日はロシアによるウクライナ侵攻が報じられた日だ。また、プーチンが日本から贈られた秋田犬を自ら「ゆめ」と名付けて可愛がっているとは、最近も話題になつて来た。

瀬戸夏子も言っているように「時事詠」はいつでもあることだが、それが目を置かず短歌雑誌の読者の何百倍もの人々の目に触れ、話題になるという事実、これはやはり短歌史のなかでは画期的なことに違いない。歌自体は、

方には記録として残さないから、「購入者」はそれをどう扱うか自由だが、求めた人はそれをお守りのように身につけて持ち歩いたり机の上に飾つたりしている。

木下龍也とはどんな歌人なのか私には知らないが、この「特集」企画の一つ、「偏愛の一首」には井戸川射子選として彼の歌、

右利きに矯正されたその右で母の
遺骨を拾う日が来る

の一首が載っている。意表を突いた発想と、合わせて肉感性もある歌だ。たしかに、これなら売れる。かもしれないと思わせた。

この人は偶然見たテレビ「ネタドリ」でも取りあげられていた。番組は歌を購入した人にも取材していたが、コ罗纳禍で仕事の無くなったピオラ奏者とか、帰郷できず父親の葬儀に行かれないか、二兄の母親等という人たちが登場して、みな満足しているように見えたのも思いがけないことだった。

代作、代詠はいにしへの宮廷歌人以

これが短歌かなあ、という思いもないわけではないが、そんな疑問はこの場合むしろピント外れであるかもしれない。反響のなかには「ネタツイ的な消費だ」という批判もあるとされているが、意味は単に注目を集めが狙いのツイッターに過ぎないというところらしい。

まだ昭和のうちのことが、三県にまたがる仲間たちと郵送による連句を楽しんでいる先輩がいたが、平成になつた頃、今度は電子メールでやっているとという話を聞くようになった。連句ではないが、それが今はツイッターとなつたわけだ。素性の知れた仲間たちとのやり取りではないにしても、翌日には翻訳者まで現れるという、この流動的で不特定多数の集団もそれなりに一つの共同体であることは否定できないだろう。とすれば、これはこれで新種の「歌会」であり「座」であるのかもしれない。

そのネット短歌の世界でいま盛り上がっているのが「二次創作短歌」「押し短歌」「アイドル短歌」あるいは「BL来あることで、短歌という制度のなかの一つと言つてよいだろう。そうした流れのなかにあるものとして、以前、ソープ嬢たちの歌を仮構した伊藤裕作の「ソープ百人一首」を紹介した(令和元年二月号)こともある。だから、木下龍也の作歌行為自体は在り得ることだといえるが、そういう歌をお金を取つて請け負う、商売にするというのは、やはり驚くべき新時代だ。新しいメディア社会の構造が、今や伝統的な歌人、結社、歌壇、歌誌等々の枠組みから完全に歌を解放して、一〇〇パーセント大衆消費社会のものにしたというところであるだろう。

ちなみにテレビ報道によれば彼のオーダー短歌は一首一万円、目下毎月二〇人程の注文があるそうだ。私も辞世歌でも注文してみようかと思つたりしたが、このテレビ放送以後はさぞかし「競争店」も現れることだろう。そして、辞世歌より辞世句の方が安上がりです、というような時代がすぐに来るかもしれない。



〈歌・小説・日本語〉 63

茂吉、山繭、ゴーガン

勝又浩

ゴオガンの自画像みればみちのくに山繭殺ししその日おもほゆ

(斎藤茂吉)

本誌五月号で触れた内藤明「万葉集の古代と近代」(現代短歌社)に引用されていた一首。柿本人麻呂時代には確立されていた定型「見れば……思ほゆ」というスタイルが近代の歌人たちにも継承されている例としてあげられている。こういう歌をみれば、万葉復興を言ったアララギ系歌人たちにも、単に写生歌というだけではない、万葉集の「構造的把握」があつたのだ、としている。

それはそれでいろいろ教わつたのだが、そうした文脈とは別にこの歌の強い印象に私は立ち止まってしまったのだ。「山繭殺し」って何だろう、それが

「ゴオガンの自画像」と結びつくとは、と。ちなみにこの歌について内藤明は「囑目の複製のゴーガンの自画像から、幼年時代の故郷山形の農村でのサディスティックな体験が飛躍をもって強引に連想させられる」と言っている。「サディスティック」とは、それが茂吉に向けていると思うとかなり強いことだが、どういう情景が想定されているのだろうか。

ゲームに浸る今の子供たちとは違って、我々の世代まではまだまだ山遊びが盛んだつたから、私も自分で作ったトリモチで目を捕つたし、ザリガニ捕りのために生きた蛙をずい分引き裂いたりもした。しかし「山繭殺し」とは聞いたこともなかった。山形地方には何か固有な民俗があるのだろうか。

というわけで、さいわい日本の山繭について長年研究している知人がいるので、早速この歌をはがきに書いて問い合わせた次第。しばらくしてどっさり資料が送られてきたが、結論を言えば、茂吉の山繭は樫、檜などに寄生する、いわゆるヤママユだろうということになった。その幼虫の腹を裂いて白糸という糸のかたまりを取り出して釣り糸にする例が古い書物にも出ていて、最近まで行われていた例もあるという。一四歳までは村の子だった茂吉もそんな遊びをしたのだろう。「山繭殺し」は殺すのが目的ではなく、テグス(字は天繭糸である)を作るための手順だったわけだ。

他もあるかも知れない、「赤光」を見直すべきかなと思つたのだが、これでの必要はなくなつた。折角だから他の四首もここに引いてみよう。

日のひかり斑に漏りてうら悲し山繭は未だ小さかりけり

榎若葉てりひるがへるうつつなに山繭は青く未だ小さかりけり

この谿にひとと太き樫の木山繭があつた繭ごもらば好む

こがらしは吹くべくなりてこの村の榎の木原に青き繭さがる

こうして並べてみると、茂吉のなかで山繭の存在はかなり大きな場を占めているらしいことが分かる。二度も「小さかりけり」があつて、いかにもその成長を待つ気持が大きかったかが滲み出ている。続いて、山繭が育つとされる別の大木をみれば、まるで実のなるのを期待するかのようない方になる。そして最後には、木枯らしが吹き始めれば山遊びの季節も終わり、その合図のように緑色の繭が一つぼつんと寂しく下つている——といった情景が浮か

びあがつてくる。これらは連作ではない。それぞればらばらに詠われたものだが、こうして集めてみると、茂吉少年の日常がほとんど山繭の成長とともに回っていたと言つてもよいほど深く関わっていた様子が見えてくる。

そして、こうしたなかに初めに引いた「ゴオガンの自画像みれば」を置いて見ると、その意味も明瞭であるだろう。他の四首はみな山繭とともにあつた日々のなかで詠まれた形を取っているが、この一首だけは、詠み手はその日々、場所から離れたところにいる。そして、山遊びがそのまま日常の生活であつた少年時代を思い出しているが、そのきっかけがゴーガンの自画像だというわけだ。茂吉にとつて「山繭殺し」日々は、ゴーガンのタヒチでの生き方に重なつたのだ。もっと言えば、ゴーガンが憧れ、回帰せんとするばるタヒチまで行つて見た・体験した、原始・野生の生活は、少年の日の自分自身のことだ、ということになるだろう。ちなみにここでも内藤明のことを引

けば、「前近代を基底に持ち続けながら近代の都市に生活する知識人の個我が強く立たしめられる」と言っている。茂吉の根底には前近代、原始、野生がちゃんと活きている。しかし、それから引き離されて生きなければならぬ都会の知識人としての現在が浮かびあがつてくる、ということになるだろうか。

*

山繭は詠わなかったが、ゴーガンについては中島敦にこんな一首がある。

ある時はゴーガンの如遅しき野生のいのちに触ればやと思ふ

中島敦は、「基底」のところにエキゾチック好みがあつて、それが時代の空気のなかで南洋や原始への憧れとしても働いた。ために後には病弱な身体を押しつけて南洋序勤めをすることになるが、行つてみての実際は身体にも心にも癒しにも快癒にもならなかった。それが中島敦における「タヒチ」であつた。「タヒチ」を自分のなかに持てた明治人茂吉との決定的な違いである。



〈歌・小説・日本語〉 64

岡野弘彦の予言

勝又浩

今期、令和四年上半期（第一六七回）の芥川賞候補五人の作家が全員女性だということと話題になっている。平成になったころから女性作家の受賞者が目立つようになり、それが次第に勢いを増してきて、平成全体では、数としては女性作家の受賞者の方が多かったのだと聞いたこともあった。そうして今、受賞者ではなく候補者の段階ですでに女性の支配が決定的になったということなのだろう。

日本社会全体での女性の進出は世界レベルではかなり遅れているようで、ことあるごとに指摘されている。そうしたなかで、こと文学に限っては早くから開かれていて、その象徴的な証拠の一つが今回の現象だと言つてよいであろう。日本では、考えてみれば万葉

日本人が「自分たちの文学をいつそう深め磨きをかけた形で書けるようになっていった」のは『古今和歌集』『蜻蛉日記』『枕草子』『源氏物語』などが現れてからだ、とも。

日本最初の日本人による漢詩集であった、ということ、日本人が初めて「詩」とか「文学」という意識をもつてつくった「懷風藻」（七五一年）が出てから「枕草子」や「源氏物語」が現れるまでには、確かに三五〇年以上の年月がかかっている。であれば、明治の文明開化から始まった、たかだか一五〇年しか経っていない日本の近代文学も、そこから「本当の」ものが現れるためには、まだまだ二、三世紀はかかるのである。確かに一つの見識である。今度の女性作家五人のなかに「本当の日本人の大和心・遊びの心」があるかどうか、それが判明するだけでも、なお数百年が必要かもしれないのだ。しかし、「そのころわれわれはもうこの世にはいない」とし、また「日本自体がどこかへ消えてしまうのではな

時代、平安時代から文学は男女平等、というより、むしろ女性によって支えられ、推進もしてきた歴史があるわけだ。で、余談になるが、私の勤めた大文学でも、全体は今もって男社会を脱せられないでいるが、なかでは不思議に文学部だけは早くから女性教員の割合が多かった。これも文学伝統の力であるかもしれない。

話が妙な方向に行ってしまったが、実は最近、岡野弘彦の新刊『伊勢の国魂を求めて旅した人々』（令和四年三月、人間社）を読んでいると、そこにこんな一節があつて、ウンと思つたのだ。

「現代、やっと女性による文学が活気づいてきました。これから後二、三世紀すると、西洋文学をまねびとつた上

いかとさえ頼りなく感じるこの頃です」とも、著者は付け加えている。まったく、まったくである。

そう言っている著者は今年九七歳。昨秋は文化勲章を授与されたが、そのとき披露されたのが次の一首。

九十七つ 齢たまはりて今日寿こゝろをな
の歌たてまつる

陛下から下された勲章を、「空からものが降ってくるような自然な感じ」で受理できた、と言っているが、それはきつと「九十七つ」の「齢」についても同じなのであろう。

続けて、昨年一二月には八千首を収めたという『岡野弘彦全歌集』（青磁社）が刊行されたが、それが今年の五月、斎藤茂吉賞を受賞するという二重の祝事となった。こうしたニュースを新聞で見ながら、まさに昭和史の生きた証人、さながら人間国宝だと思つたことだ。新聞報道にはなかつたが、昭和二〇年一月、彼は召集を受けて、毎日爆弾を抱えて戦車に体当たりする

で、本当の日本人の大和心・遊びの心を持った文学が出てくることでしよう。そしてそれは女性によつてもたらされるでしょう、と私は予言しておきます」と。

日本の文学を常に神代の時代からの永い歴史のなかで考えている人の、これが現代への警醒であり「予言」なのだ。芥川賞候補作家が女性ばかりになったからと言つて騒ぐのなどはまだまだ早計だということになるうか。数人なかではない、質として、「本当の日本人の大和心・遊びの心を持った文学」が出現するのはまだまだ二、三世紀かかるというのである。

著者は悲劇の王子大津皇子が、よく知られた哀切な短歌の他に、『懷風藻』に残した漢詩を引きつつ、それがまだまだ生硬未熟なままである事実を指摘したうえで、こんなふうと言っている。「和歌の方が言葉に無理がなく叙情が心の通りに響いてくるのは、まだ日本に漢字が入って間がない頃のことですから致し方ないでしょう」と。そして、

訓練ばかりさせられていたような経験もしているのだ。さいわい戦地に赴くことなく終戦となったが、復員後しばらくは生きる目的を失っていた、そんな時期もあつたのだ。そうしたなかで彼が最初に訪ねたのが伊勢神宮であつたと、この本にも書かれている。

詳しく紹介するスペースがなくなつたが、本書は『古事記』の倭建命から始まって、速総別はやふらの王と女鳥の王女の道行き、業平、西行、芭蕉等々、伊勢詣でを人生の大事とも転機ともした神話や歴史上の人物たちの跡をたどりながら、日本の民族的な「諸物霊信仰」いわゆるアニミズムの在りようを浮かび上がらせている。伊勢神宮は、たとえば女神天照大神を祀りながら、しかし神さまの嫁たる斎宮を、代々皇室から遣るというような不思議のたくさん在るところだが、その混沌は、日本人の信仰のうえでも文学のうえでも、「伊勢は日本人の心のへその緒」であり続けた。そうした事実を、歴史を静かに語っている。